歴史文化と先端科学の融合――デジタル人文学が研究手法やビジネスを変革する

源氏物語を通して平安人の心に触れる データ化・デジタル解析による読み解きは様々なジャンルやビジネス面への応用も

京都先端科学大学の人文学部は、その独創的な取り組みで脚光を浴びている。今なお世界中で愛読されている「源氏物語」。その研究の第一人者が大学の教壇に立つ一方、テキストのデータ化&デジタル解析という先端科学との融合でさらに研究を深掘りしようとしている。この手法は様々なジャンルやビジネスにも応用することができることから、大きな期待が寄せられている。

京都先端科学大学
人文学部 歴史文化学科
教授
博士（人間・環境学）
山本淳子 氏
Yamamoto Junko

「源氏物語は1000年たっても新しい」。源氏物語・紫式部研究の第一人者である人文学部教授の山本淳子氏はこう表現する。紫式部が源氏物語を世に出したのは、平安時代中期の1008年（寛弘5年）ごろとされている。主人公の光源氏を通して、宮廷内での恋愛、栄光と没落、政治的欲望と権力闘争など、当時の貴族社会を描いている。

「私が紫式部に興味を持って研究を始めたのは大学院生の頃です。彼女の日記には、『漢文の能力があるのに男性ではないので生かせないと父に嘆かれた』と記していました。私はそれを読んで『どれだけ紫式部は悲しかっただろう』と思わずにはいられませんでした。いつの時代も空気を読まなければならない状況があり、人はそこから自由にはなれません。平安の人たちは日々何を考え、どのように暮らしていたのか。源氏物語を通じて一人ひとりの心情を読み取っていくと、文献初出から1000年以上たった今と変わらないものが見えてきます」

今なお世界中で愛される源氏物語

「当時は男性による官僚社会。約200の上級官僚のポストを巡って出世競争が激しく、家柄・縁故のある者が重用されました。意外とみんな忙しく残業続きで、時には夜勤もあったそうです」

下級貴族出身の紫式部は、20代後半で結婚したが、3年ほどで夫が亡くなった。その寂しさから創作を始めたところ、仲間うちで評判を呼んだ。その後、藤原道長の支援によって宮中に上がった紫式部は、54帖からなる長編の源氏物語を書き上げた。

ただ、源氏物語は世界的古典文学でありながら、紫式部の筆による原本は現存しない。「数百の写本、伝本があるものの、誤写や意図的な改ざん、2次創作が繰り返されてきたことで、細かい描写が変わってきています。歴史は事実かどうかが重要なのに対して、文学は時代時代で、読み手それぞれの心で自由に読めばいいと思っています」。

山本氏の言葉どおり、源氏物語は日本を飛び越えて世界30カ国以上の国・地域の言葉に翻訳・出版されている。

「タイでは源氏物語ファンサイトもあり、様々な意見交換や交流があるそうです。光源氏と妻、愛人による複雑な人間関係があり、愛人は苦しさから心が幽体離脱して妻のカラダに取り憑くといった話も出てきます。華麗な装束、大宴会などのエンターテインメント性、恋愛、陰謀など、新しさと多様性、懐の深さがあります。こうした要素が時代と国・地域を超えて共感を呼ぶのでしょう」

文学は将来につながる入り口

山本氏が所属する人文学部歴史文化学科の学生は、男女比率が7：3。男子学生は歴史に、女子学生は京都や京都文化に関心を抱いて入学してくるという。「文学部出身は就職に不利というイメージがありますが」と率直に尋ねると、「文学は将来につながる“入り口”に過ぎないんです」と山本氏は返す。

「私もそうでしたが、文学部を選択する学生はもともと何かを掘り当てると、とことん追究する質の人が多いんです。例えば、今年の卒業生の1人は京都拠点のアパレル企業を卒業論文の対象にしました。足袋や和服などをオリジナルブランドで展開するなど、世界に向けて新しい日本文化の創造に努めている企業です。また、ある学生はゲーム好きが高じて花札に興味を持ち、花札製造から始まったという任天堂を研究しました。この学科に入学してキャリアや人生観が変わった学生をたくさん見てきました」

さらに山本氏はこう続ける。「つまり、文学・古典文学を入り口として、自分の好きなことや興味のあることで一点突破すると、そこから『世界につながっているんだ』という気づきが得られるのだと思います。『京都・日本発グローバルへ』という流れは、紫式部がユネスコ※世界偉人暦に日本人として唯一選ばれ、今なお世界中で愛読されていることと何か共通するものを感じます」。

山本氏が手掛けた源氏物語や紫式部に関する著書は、いずれも考察の視点が独創的で読者の人気も高い

「デジタル人文学」ビジネスにも

京都先端科学大学では、古典文学をまた別の“入り口”とする新たな試みが進行中で、その1つは2022年4月発足の「源氏物語テキストアナリティクス・センター」だ。センター長を務める山本氏は取り組みについてこう解説する。

「まず『源氏物語』の写本に記されたテキストを読み込んでデータ化し、そこから得られる様々な情報を分析します。この1年間で取り組んできたのは、全54帖のうちの第1帖と第2帖の関係です。デジタル人文学、とりわけデジタル化されたテキストを統計的に分析するテキストアナリティクスの手法を用いて、源氏物語の研究に新しい光を当てることができればと考えています」

「源氏物語テキストアナリティクス・センター」のメンバー。写真右から（いずれも人文学部）、学部長・佐藤嘉倫氏（社会学）、山本淳子氏（センター長、日本文学）、山 愛美教授（深層心理学）、丸田博之教授（言語学）

デジタル人文学によって文学・歴史研究を革新する独自の取り組みは、さらなる拡張性を秘めている。デジタル解析を担当するのが、同センターのメンバーでもあり、データサイエンスの第一人者である特任教授の金明哲氏である。

「テキストアナリティクスは書き言葉、つまりテキストにおける単語・文・段落の長さ、単語・音節・文節などの使用頻度、またその組み合わせの使用頻度といった“特徴量”を計測し、分析します。昨今、テキストマイニングとして社内報告書、SNSや口コミの分析などビジネス面にも広く用いられています」

金氏の共同研究によると、企業の有価証券報告書に使われた言葉を分析して2年後の倒産予測をしたところ、その的中率は約90%に上ったという。

これらの研究の原点はスタイロメトリーであり、この技法は美術や絵画、音楽、舞踊などの計量分析にも応用できる。デジタル人文学を“入り口”とした独自の分析手法の進化・発展に、大きな期待が寄せられている。

※ユネスコ（国際連合教育科学文化機関=UNESCO）

KUAS 京都先端科学大学 KYOTO UNIVERSITY of ADVANCED SCIENCE
〒615-8577
京都市右京区山ノ内五反田町18
www.kuas.ac.jp/